

Title	斯道文庫蔵『古今賢問愚答』(零本) 解題と翻刻
Sub Title	A reprint and a study of Kokinkenmonguto housed in the Shido bunko institute
Author	川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2014
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.49 (2014.) ,p.1- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20140000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

斯道文庫蔵『古今賢問愚答』（零本）

解題と翻刻

川上 新一郎

はじめに

前輯に引き続き斯道文庫所蔵の古今集注釈の零本を紹介する。片桐洋一氏御所蔵当時展観された事があり、その際簡単な説明が加えられているが、内容は未紹介であった。室町期の草稿で、現存するのは巻頭歌から春下の126番歌を掲げたところまでである。珍しいのは問答体となっていることで、自問自答ではなく、実際の問答であると考えられる。末尾を欠いているため、年代、問者・答者に関する手がかりも一切なく、前輯の『古今和歌集〔長享三年講釈〕』以上にいかなる注か明らかでないが、内容的

に注目すべき点がある。かなり虫損があるため、解題に続いて翻刻を掲げる事とする。前輯と同じく、類本なく、草稿でもあるため、翻読に困難がある点、あらかじめ諒とされたい。

一 書誌

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵（〇九一―ト三五八）

古今賢問愚答 外題 存卷一、二（尾欠）

〔室町後期〕写・自筆草稿

一冊

仮袋綴。本文共紙表紙（二七・六×二一・七糎）、左肩打付書「古今賢問愚答」。尾欠により裏表紙なし。料紙、楮紙。墨付、

二三丁。遊紙なし。字面高さ、約二五・五糎（和歌本文）。每半葉十二行内外不等。内題なし。序文様のもの六行の後に「春哥上」とあり、巻二は「春下 巻第二」とする。巻二の末尾近く「おもふとち」(126)の歌本文を掲げ、以下落丁。従って、奥書なし。印記、表紙中央「新宮城書藏」（重郭朱印）。他に左下に朱丸と「丙之式番」、右下に「丁之三番」とする単郭朱印（整理棚番号であろう）あり。平仮名交り文で、表紙外題をふくめ全巻一筆の草稿と見られる。

現存部分は巻頭歌より126番歌までの内、七十二首（126番歌は歌のみで以下欠）の抄注で、和歌を二二句掲げ、以下省略の記号があり、改行一字下げして問があり、さらに問より一字下げで答がある。塗抹や行間・余白への書人が多い。また、虫損があり、読み得ぬ所もある。

書写年代については確言できず、内容との関わりもあるが、前輯の『古今和歌集（長享三年講釈）』と同じかやや下るのであるまいか。後にさらに検討する。

二 内容

本書は片桐洋一氏旧蔵本で「和歌史研究会々報」85（昭60・8）によれば、和歌文学会関西例会（昭和六十年七月六日、於大阪女子大学）に展覧されたとのことである。片桐氏の解説には次のようにある。

一九、古今賢愚問答（写本）

「……如何」と聞く某の問に対して著者が答えたもの。

室町時代の著者自筆稿本。未研究。新宮城書藏本。

書名が「古今賢愚問答」となっているのは本書を収める帙題簽によられたためであろうが、帙ならびに題簽の墨書（鉛筆の下書きが見える）いずれも近時のものでさしたる由緒はないと思われるので、正式書名は本書の外題に従い、「古今賢愚問答」とすべきであろう。^①外題が「古今賢愚問答」であるにもかかわらず帙外題を「古今賢愚問答」としたのは、「賢愚問答」という語が耳になじまない上、序文様のものには「数ヶの愚問は巨細の賢答を仰き奉る儀にて候へは」とあって、こちらは「愚問賢答」の形であることにもよろう。^②つまり「賢愚問答」という題名は妥協の産物なのであろう。

実はこの題名の問題が本書の性格を知る上で重要となる。後の翻刻を参照されたいが、冒頭の序文様のものは「古今集哥の

不審注あつめてこれを捧候」と言い、「小児のいろはなどはなとらひ候やうに手をとるく御教訓大幸たるへく候」と言い、明らかに問者の文章である。従つて、この文中で「愚問」と言い、「賢答」と言うのは当然である。

一方、問も答も外題も一筆である。つまり本書は答者の手になる草稿である。答者にとつて問者の序文を引写すにおいては「愚問」であり「賢答」であつても差支えないが、外題を記すときは「愚問賢答」とは書きにくかつたので、逆にして「賢問愚答」としたのであろう。つまり答者にとつて問者はただの弟子ではなく、目上か、それなりに身分の高い人物であつたと考えられる。

また、本書は草稿であつて、訂正、塗抹、補入などがきわめて多いが、よく見ると、問には訂正等がなく、答にのみ著しい³⁾。さらに訂正、塗抹、補入などを訂正前の文と比較すると、それらは推敲の結果と認められ、問書の際の文字の乱れなどではない事も明らかになる。また、答の文は問の文とほぼ同大の字詰で書かれている。

従つて、本書は問者の問の一斑をもとに序文と問を引写し、一首毎に答を推敲しながら書付けていったものである。つまり、

あらかじめ余白があつたものではなく、答を書終えると次の歌に移つていったと考えられる。但し、答が全て抹消されている箇所がある事から解るように、後に全面的な見直し訂正が行われた痕跡がある。

当然のことながら、本書は草稿であり、これを清書して問者に提出するつもりであつたと思われる。清書と提出が行われたか否かは不明であるが、本書は推敲の跡を留めている点からも貴重である。但し、訂正、推敲はミセケチではなく、塗抹で行われているため、訂正以前の文字の多くは読み得ない。

このような問答体の古今集注釈としては、古くは『古今問答』(中山兼宗問・藤原俊成答、建久二年(一一九一)成立、天理図書館蔵)が知られている。また、『三流抄』には問答体のか、問答体でないものがあり、こちらは実際の問答なのか、架空のものかは不明である。その他、本稿でも後に取上げる大江広貞注の仮名序部分も問答体である。しかしながら、このような問答体の注釈は数少なく、しかもなまましい草稿である点興味深い。

さて、次に内容を検討するが、本書は実際の問答で、問次第で答え方が変わってくるため、他の注釈書との比較が難しい。

また、先に述べたように、問者は答者より目上かそれなりに身分の高い人物と見られるが、いずれも何人かの手がかりはなく、年代も明らかでない。

ここではまず、本書の答の部分で特徴のある箇所をあげ、他の注釈との比較を行うこととする。歌本文をあげ、問は省略し、答で問題とする部分のみを掲げることとする。全体は後述の翻刻を参照されたい。

としのうちには春はきにけり一とせをこそとやいはんことしとやいはん(一)

此哥昌泰二年十二月十九日の立春をよめり(後略)

このように根拠もなく、詠作の日時や作者名などの固有名詞をあげたり、説話化したりするのは、中世の古今集注釈にまま見られるもので、その場合、別種の注のみならず、同種の注でも日時や人名、説話の構成が異なることもある。

そのような注については片桐洋一氏が『中世古今集注釈書解題』(昭46〜62刊)において詳細に述べられているが、多種の注があるのみならず、諸本の異同が大きく、同じ注の異本なの

か、別の注と称すべきなのが判然とせず、扱いに苦慮する場合が多い。『古今集注釈書伝本書目』を作成した際もその辺りは明確でなく、取りあえず類似の注はまとめておくしかなかったのが実情である。

そのような状況であるからして、本書が古今集注釈の中でいかなる位置にあるかを明らかにすることは難しい。それでも漠然としたことを言えば、毘沙門堂本古今集注、弘安十年古今集歌注、古今和歌集三条抄、大江広貞注などと分類した注と関係がありそうとは言える。

まず、1番歌で「此哥昌泰二年十二月十九日の立春をよめり」と年月日を述べている。但し、年月日を言うのはここだけである。先に挙げた本書と関係があるかもしれないとした注釈はいずれもこうした年月日をあげる注である。

毘沙門堂本古今集注は毘沙門堂旧蔵本では「昌泰二年十二月十九日」であるが、毘沙門堂旧蔵本より古態を有すると思われる曼殊院本では「元慶八年十二月」となっており、必ずしも同種の注でも年次が一致するとは言えない。

たとえば、弘安十年古今集歌注(佐賀県立図書館本)ではこうなっている。

ふる年に春立ける日とは昌泰二年十二月十九日立春日仙洞の哥合によめる（後略）

これが、同じ弘安十年古今集歌注でも尊経閣文庫本（天文六年写本）ではこうなっている。

旧ル年ニ春日ト云フハ仁和三年十二月春立日仙洞ノ哥合ニヨメル（後略）

やはり年次に異同がある。

また、古今和歌集三条抄は次のようである。

昌泰二年十二月十九日立春ナレハナリ

ついで大江広貞注である。

（前略）寛平二年、閏月ありしかは、そのとし十二月廿八日ニ土用あきて、春の節分になりし日よめる哥也。（後略）このように架空の年次や場を設定するについても、注によってまた、伝本によってさまざまである。

本書がいずれに最も類似するかはわからないが、いずれにしてもこのような注釈の影響下にあるとは言えよう。

次は「よぶこ鳥」を論ずる29番歌である。

をちこちのたつきも…（29）

（前略）よぶこ鳥春の山などに鳴鳥、其すかた何鳥ともたしかにはならず候、但三鳥大事など申て、はと、猿、はこ鳥など申めり、高麗にある女の子をくして野を行時鷺に子をとられて歎死て彼鳥となれり、はやこくと鳴、我子をよぶ声也、それをはこ鳥と云ともいへり、よぶこ鳥この説を似よりたると申き、鶯と云一説も待るにや

毘沙門堂本古今集注は次のようである。毘沙門堂旧蔵本、曼殊院本はほぼ同じであるので、曼殊院本のみ示す。

（前略）よぶことりさまくの義あり、賀茂重保は猿を云といへり、此義心えず、俊忠はうくひすを云と云へり、させる説はなれともきとくと鳴は子をよぶに似たればよぶこ鳥と云也、或人云、三月はかりにはことりと云ものと云へり、此は万葉の注にあり、高麗国に永蘭と云野に下女の子をいたきてとをりけるを鶯にとられてはやこくとよひしに死たりけるか、鳥となりてこれいまもはやこくとよぶをはことりと云といへり、此を喚子鳥といへり、国信朝臣脚歌はす、めを云といへり、皆させる本説なし、しはらく本説につかははことりを云へき歟

弘安十年古今集歌注は次のようである。佐賀県立図書館本は

長大なので、一部に破損はあるが、尊経閣文庫本で示す。こちらのほうが原型に近いのではあるまいか。

(前略) ヨフコトリトハ、或ハ猿ヲ云トイヘリ、誠ニハコ鳥トテ三月ナントニ山ニアル鳥也、ハコくト鳴也、ヨフコト書ケリ、是〔伯〕選ト云文ニ委クアリ、昔高麗永蘭山ト云山ヲ女ノ子ヲイタキ〔テ〕トホリケルカ、白地サシスヘタリケルヲ鶯〔ニ〕取レテハヤコくト鳴キアリケルカナキ死ニケリ、此鳥ト成レリ、生レカヘリテ鳥ト成テモ尚ヲハヤコくト鳴也、仍喚ヨフコ子鳥ト名付、(後略)

古今和歌集三条抄は「或曰」として毘沙門堂本古今集注と同じものを引用するが、本来の部分には「はやこく」の注はない。なお、付言すると、古今和歌集三条抄はもともとここに掲げた注釈類と類似点のある注であるが、「或曰」とする部分は、右に述べたように毘沙門堂本古今集注による増補書入であり、一段と毘沙門堂本古今集注に類似しているように見えるので注意を要する。

大江広貞注にもこの話はない。
次の例(33番歌)はどうかであろうか。

色よりも香こそ(33)

(前略) 一首躰に就ては異国の古事も侍る歟、照明大子の女を思けるか彼女我國へ帰ける時宮中の庭の梅花袖に入れて帰りて即死云々、大子歎の余に尋行云々、此袖の梅をみて形見とせる事の侍るとかや、此□の子細さしてきたにをよはさる歟、或説につきて無詮(モウ)なれとも凡注也(後略)

毘沙門堂本古今集注(曼殊院本)ではこうある。

(前略) 梅の花の香は古人の袖の香ににたりと云事あり、その心也、文集云、梅香有薰伝古袖と云り、文の心は大唐に照梁太子と云人他国より来れる女を思けるか彼女本国へかへるとて衣をかたみにと、めてかへりぬ、王子かの衣をとりて見れば梅花をつ、めり、此花かの女のありかに似たり、それより梅か香を古の人の袖の香と云事あり、その心をよめる也

弘安十年古今集歌注は次のようである。尊経閣文庫本で示す。
同(寛平) 御時ノ哥合ニ宇多院ヨミ給フ御哥也、此哥ハ史記ノ文ヲヨメリ、梅香衣ニ薰シテ旧人之跡問、非夢非覺ル、恋慕之涙夕失神シ、先帝相顔何忘テ安年ヲ、此文之意ハ禹御門ノ〔子ニ〕照琳太子ト云人在セリ、女ヲ心サシ深

ク思玉ヘリ、彼女本国へ〔帰〕時彼太子ノ斬端ナリケル梅
之ウツクシカリケルヲ袖ニコキ入テツツミテ帰リス、程無
ク死シテ太子此事ヲ聞テ歎テ無限シテ彼ノ女之國ニ尋テ行
給ヒテ其家ニ行キ給ヌ、主ハ無シテ空キ衣ノ有ケルヲ取テ
見給タリケレハコキ入テツ、ミタリシ花本ノマ、ナリ、太
子はヲ見テ深クテ彼女ト云フハ直人ニアラス、彼ノ國ノ王
ノ姫宮女帝御門也、照琳太子之色深キヲ問テ彼ニ逢ムカフ
メニ直二人之形ニ成テ太子ノ國ニ行テ奉レリト逢云フ、
自是シテ梅カ香ヲ袖ニ薰スト云ヘリ、必ス哀傷ニ説タル也
古今和歌集三条抄を見てみる。

昔大國(本)照イニ昭明太子ト申ケルオハシケリ 年比女ヲ思召ケル
ニ俄親ノ國ヘ罷トテ梅花ヲ袖ニ入タリケリ 遙ニ久シクマ
イラサリケレハ素尋ニ行給ヌ 彼女俄ニ死タリケリ 素歎テ
臥シツツミ傍ヲ見給ヘハ梅花アリ 此心ヲヨメリ 染殿内侍
哥也 或曰 梅花有テ薰フ古袖ヲニ云文ノ心也ト云ヘリ
大江広貞注は以下のものである。

此歌の心は、李夫人死後、漢皇の御思ひのあまりに、彼
あひし給し梅の、彼御匂かのひにしみたるを、かのなつかしき
に、御殿の軒は近くうへられたりしほとに、そのむめの香

のうつくしきを、李夫人の恋しき御かたみにおほしめしな
して、御覽しける心をよめる〔口〕也。
これを見ると、どうやら大江広貞注は本書、毘沙門堂本古今
集注、弘安十年古今集歌注、古今和歌集三条抄とは一線を描し
ているらしいことがわかる。そこで、以下では毘沙門堂本古今
集注以下の三注と比較することにする。

人はいさ心も：(42)

此哥のことは、はつせにまうつることとあるは、貫之か
父文袴袴か子子をもち侍らて長谷観音にいのり申て貫之を生せ
り、しかれば貫之つねに長谷にまいりけるに宿せるやと也、
人の家とあるは淨尊法橋の家也、古郷といふは貫之つねに
參所なれば長谷を古郷と云り(後略)

毘沙門堂本古今集注(曼殊院本)は以下のものである。

(前略) 貫之は長谷寺に月ことにまうつる也、此故は紀文
轉男子のなきことをなけきて泊瀬の寺にまうてける時夢に
經をたまはると見て後貫之をうめり、經をたまはると見け
る故に名内教房と童名を云へり、人の家とは淨尊法橋の家
也、哥にふるさと、云は常に參る所なれば貫之はせをふる

さと、云也

弘安十年古今集歌注（尊經閣文庫本）にはこうある。

詞長谷マウツルトハ貫之常ニ參ケル也、是ハ貫之長谷利生
ニ儲タリケル子也、上ニ如云カ家主ト云ハ忠峯カ舅柴仙法
橋也、サタカニナントハ定テト云事也

人ハイサ心モシラス古郷ハトハ貫之カ常ニクル所ナレハ云
フ、サレトモ実ニハ彼ノ所ノ名ニ古郷ト云フ名アリ、其意
ヲヨメリ、万葉ニ云、御長谷野布流サヘテ吹風野音ニソヒ、
ク鐘ハアリト云、是モフルサト、ハ所ノ名也

古今和歌集三条抄はこうある。

貫之ハ長谷寺觀音ノ申子也 父文韓子ノナキ事ヲ歎テ月マ
ウテヲシケルニアル夜ノ夢ニ御張ノ内ヨリ経ヲ一卷給トミ
テ貫之ヲマウケタリ（巻之二内教房ト名ツトヘリイ電）（中略）カクテモ昔ノ

ヨシミニテハツセヘ常ニ參詣ス 哥ニモ古郷ト侍リ 大方
大和国ハフルキ都ニテ古里トイヘリ 初瀬ハ雄畧天王ノ都
也 或曰 序ニ人ノ家ト云ハ淨尊法橋ノ家也

山吹はあやな、さきそ… (123)

（前略）但橋諸兄大臣山城国井出の寺に山吹をうへたりけ

るに仍井出大臣ともいふといへり、又迦留大臣同国光明山
の寺を造てかの井出の寺の款冬をうつしてうへて後諸兄大
臣のもとへ見におはせよ、といひつかはしたりければ、ゆ
かんといひてやくそくたかひければ、迦留大臣のよみて諸
兄のもとへつかはしける哥といへり

毘沙門堂本古今集注（曼殊院本）は以下のようにである。

（前略）此哥は橋諸兄の大臣山城国の井出寺を造てくわい
ろうに山吹をうへませり、仍号井出大臣と、高向迦留大臣
同国に光明寺を造て彼の井出寺のやまふきをうつして廻廊
にうへて後、諸兄のもとへみにおはしませよと云やりたり
ければ、こよひゆかんと云てこざりけるによめるなり、迦
留の大臣の哥也、（後略）

弘安十年古今集歌注（尊經閣文庫本）にはこうある。

此哥ハ日本記ニ有リ、是ハ左大臣橋ノ諸兄山城国井出寺ヲ
作りテ廻廊ニ山吹ヲ植タリケリ、内大臣高向ノ迦留彼ノ寺
ヲ遷テ光明山ヲ立山吹ヲ移シテ彼ノ寺ノ廻廊ニ植テ彼ノ迦
留カ諸兄ノ方ヘ使ヲ以テ云ヒ遣ル、君ノウヘケン山吹ヲ移
シ植タル、来テ見給ヘト云ケレハ、コント云テマサリル日、
読遣ス、迦留大臣ノ哥也、（後略）

古今和歌集三条抄はこうある。

(前略) 右大臣橘諸兄山城ノ井堤寺ヲ作テメクリニ山吹ヲ

(井堤比治トイ)

(朱羅館ニイ)

ウヘタリケルヲ經大臣ヤマトニ光明山ヲ作テ井堤ノ款冬ヲ
ウツシテ植タリ 諸兄大臣ヲヨヒテミセムトシ給ケルニコ
サリケレハ読(念)諸兄大臣ノヨメルイテツカハシケル也

説話的な箇所を選んで比較してみたが、本書がこれらの注釈と類似している点は確認できるであろう。さらに言えば、本稿で取上げた四種の注釈の中では、毘沙門堂本古今集注が最も類似していると言えるのではなからうか。

さればと言って、本書がことごとく毘沙門堂本古今集注と説を同じくするとは言えない。

例えば次のような箇所である。

春の日の光に… (8)

春の日は春宮御事也、陽成院東宮の御時御同居ありければ東宮の御休所事也、かしらの雪しらかなるへし、わひしかなし凡同事にて侍へし、物かなし物わひしらなともいへり

これが毘沙門堂古今集注(曼殊院本)ではこうなっている。

(前略) 清和天皇春宮の太子の御時也、この時二条后春宮のみやすところ也、(後略)

弘安十年古今集歌注(尊經閣文庫本)でも清和天皇、古今和歌集三条抄はだれとも言わない。念のため言えば、大江広貞注も清和天皇である。

このような具合で、毘沙門堂古今集注が比較的類似しているとは言っても、本書がそのような注に直接よっているとは言えないようである。

三一 成立

本書は零本であるためもあって、成立に関わる手がかりも固有名詞もない。従って、成立に関して言えることはほとんどない。

まず、成立年代は本書が草稿そのものであることから、書写年代がそれとなるが、まず、室町後期から末期にかけてとして大過ないであろう。また、本書の問者が答者に対して単なる弟子ではなく、目上の存在(ある程度地位の高い人物)らしいことも既に述べたが、どのような背景にあるのかは全く不明である。ただ、問答の内容を見て、なにがしかの推測をすることは

許されるであろう。

まず、問者が大変熱心であることがわかる。ほとんど一首毎に質問しており、時には微に入り細を穿って質問して、答者を悩ませることもあるほどである。古今伝授を受けるほどの域に達しているか否かはとにかく、少なくとも初心者でないことは明らかである。

また、既述のように、答者は時に説話に言及することがあるが、問者の方からそのような話題に触れることはなく、あくまで和歌の解釈中心に尋ねている。その際、依るのは『僻案抄』にはほぼ限定されている。これは『僻案抄』と『顕注密勘』を特に重んずる中世諸注と同様である。ただ、中世諸注にまみ見られる『僻案抄』を特別扱いして「御抄」と称することがない点は一応留意すべきかもしれない。

一方、答者について注目すべき点は、「当流」「家説」の言葉が見える点で、歌道師範家の一員もしくはその教えを受けたものという立場の物言いである。例を挙げれば次のごとくである。

あさみとりいと…(27)

柳かは柳哉といふ心なるへし、玉にもぬくか春のあをやき

とある本もみえ侍る歟、当流た、柳かを用、あさみとりも浅也、朝説をは不用

これなどは、『六巻抄』に「浅緑也一説朝緑ト云、不用。」とあるのに対応していて、まずは普通の発言である。

次はどうであろうか。ここでは問者が『僻案抄』を引用して尋ねているので、全文引用する。

も、ちとり…(28)

僻案抄に両説あり、此鳥まことはいづれの鳥を申候やらん、たしかに一説の御口伝をうけたく候

僻案抄に両説候歟、愚本被借失て不及引見候、家説先百千の諸鳥と心得候、又鶯の説これも一向に不捨候、萬葉に、我やとのゑのみよりはむも、ちとり千とりはくれと君はきまさす、とある歟、これもうくひすとはきこえず、此集鶯の哥をはなれても、ちとりよふことりなど入たる心にてもおほよそをしはかられ侍るにや、後拾遺にも鶯の哥をはなれて入たる歟

まず、注目されるのは、「僻案抄に両説候歟、愚本被借失て不及引見候」という発言である。答者は「僻案抄」を貸し失せて所持していないという。定家が『源氏物語』の証本を盗まれて長い間不便を託っていたというのは有名な話であるが、それは証本がないだけで、『源氏物語』を持っていなかったわけではない。しかし、この場合は明らかに本そのものが手元にはないといっており、不審を覚える。また、『僻案抄』を否定した箇所はないものの、特別扱いもしていないように、そのような物言いが随所に見られる点も見逃せない。次は『僻案抄』を引いての間に「家説も同前なり」と答えた例である。

たれしかもとめて…(58)

僻案抄には誰しかものしもしはやすめたるものしやうに注せ

られたり、此儀をまもるへきにや

家説も同前なり

次は、同様に『僻案抄』を引いての間に、「此哥先達種々申ける歟、僻案抄義大概当家も同心にて候、其儀そしかるへく候はんすらん、但上に如申候、依無本不及引見」と答えている。

この辺り、『僻案抄』との距離をどのように解するかは微妙である。

さくら花春くは、れる…(61)

此哥僻案抄にも注せられ侍れとその注猶分明に存知せられす候、あかれやはせぬ、いか、心得へく候哉

此哥先達種々申ける歟、僻案抄義大概当家も同心にて候、其儀そしかるへく候はんすらん、但上に如申候、依無本不及引見、(後略)

以上、判然としない検討を行ってきたが、説話に言及するところ、『僻案抄』にながしかの距離感があることから、本書の答者は例えは二条家の正統に属する人物ではないと言えそうである。

もう一つ留意すべきかと思われる点は、本書の成立時期との関連である。室町後期から末期と言えば、宗祇以後である。この時期は、既に説話をしばしば持ち出す注釈は時代遅れと考えられる。無論、先に比較の対象とした注釈類の写本は多く近世期の書写本であり、それらの注釈類も伝えられていたことは確かである。しかしながら、伝え書写することと、講釈すること

との間には落差があると考えられる。近世期に中世の注釈の集成を手がけた北村季吟の『教端抄』や平間長雅系の人々が集成したと考えられる『古今集諸抄』（大阪府立図書館蔵写本）を見ても、伝授系統にはそれほどこだわっていないにもかかわらず、前記説話系の注釈はほとんど含まれていない（後者には弘安十年古今集歌注と関わりがある「三流抄」が含まれている）。それらを考えれば、本書が本流をそれていることは言えよう。説話系の注釈類には正統派の注釈ではないという印象がつきまとうが、宗祇以後となれば、一層その感が深い。

以上、あまりに漠然とした物言いであるが、本書の成立した場は具体的に指摘は出来ないが、そのようなところを想定すべきではなからうか。

〔注〕

(1) 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『古今集注釈書伝本書目』（平19刊、94頁）では実見せず、片桐氏の解説をそのまま載せた。なお、同書51頁でノートルダム清心女子大学蔵（黒E98）『愚問賢答抄』を「別書か。」としたが、やはり別書であった。

(2) 二条良基問頼阿注『愚問賢注』の題名の類推からしても「賢問愚答」は異例に思われる。

(3) 2番歌の問の後半が小字補入であるほか、72番歌にも若干訂正がある。

(4) 主として第二巻、第三巻参照。

(5) 尊経閣文庫本は宣命書き形態であるが、いま片仮名交り文とした。なお、以下引用の諸本は既刊の翻刻以外は、いずれも表記を改めたり、ふりがなを省略したり、句読を加えたりしている。

(6) 徳江元正氏編「室町文学纂集」第二輯（平2刊）の翻刻（徳江元正・石川透・宮内克浩氏）による。

(7) 京都大学国語国文資料叢書48『古今集註京都大学蔵』（昭59刊）の翻刻（新井栄蔵・田村緑氏）による。

(8) 片桐氏『中世古今集注釈書解題』第三巻（昭56刊）による。

(9) 『明月記』元仁二年（一二二五）二月十六日条に「年来依懈怠家中無此物（源氏物語、稿者注）、建久之比被盜失了、無証本之間、尋求所々雖見合諸本、猶狼藉未散不審」とある。

凡例

一、以下は慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵『古今^{賢問愚答}』
零本（〇九一―ト三五八）の翻刻である。

一、漢字、仮名ともに原則として通行の字体に改めたが、一部旧字体、異体字を残した場合もある。

一、翻読の便宜のため、私に読点を付した。

一、訂正、推敲箇所は、原則として訂正後に従った。塗抹のため、訂正以前の文字の多くが読み得ないからである。但し、注の大半が抹消され、かつ抹消以前が判読可能なものについては、注記して示した場合もある。

一、各丁表裏の代り目を「」で示した（丁数、表裏は示さない）。

一、虫損による判読不能箇所や難読箇所は□で示した。

一、推読した場合は「」を付した。

一、書き誤りが疑われる箇所、意味不明の箇所には（ママ）を付した。

一、原本にある省略記号は…で示した。

一、注の対象となる和歌・詞書の末尾に括弧（）を付して新編国歌大観番号を示した。

〔翻刻〕

古今^{賢問愚答}（外題）

古今集哥の不審注あつめてこれを捧候、数ケの愚問は巨細の賢答を仰き奉る儀にて候へは小児のいろはなとならひ候やうに手をとるく御教訓大幸たるへく候、凡心及はざるに依て口伝申へき所もる、事のみあるへく候、ふかく御憐愍にあつかるへき也

春哥上

としのうちに春はきにけり一とせをこそとやいはんことしとやいはん（一）

此哥いかなる殊勝ありて此集の巻頭となり候やらん、又年といふ字四所にあり、今の世には哥の病をたて、きはる、事の侍るをや、此哥如何

此哥昌泰二年十二月十九日の立春をよめり、いかなる所殊勝にて此集の巻頭に入候哉の不審末代浅智及かたく候、一年といふ事四所にあり、二などは古哥常事也、これはわざとをきたる詞也、やかて此集誹諧にも、我を思人を思はぬむくひにや我か思人の我をおもはぬ、とあり、ことなる不審なし

此注少下へシ^①

袖ひちて：^{以下略}(2)

僻案抄にはひちてとはひたしてといふ事也、と注せられ侍り、一向にひたしたる事歟、袖をふれたる風情歟、いか、心得へく候哉、又此哥水結ふは夏也、氷は冬也、しかも春の哥也、秋はその中にこもればこれすなはち四季を詠する(と申説々をば用へき事にて候やらん、これらは自然の事歟、わさと三を求いたしてよめる事歟、そのゆへ如何^②)

此哥袖ひちてはひたして也、今はこのみよはず、四季三季のさためある歟、なれともた、水のさまくなる事をよめるはかり也、月令に立春日東風解氷事又誰も存知事也

春かすみたてるや：(3)

此哥かすみのか文字にこりてよむへく候哉、すみてよむへく候哉、又「いつこは春はきぬれとも霞たつとはみえず」とかめたる心にて候哉

かすみのかもしすみてよむへし、無儀によりてさしたる沙汰にをよはず、春といへといつくかすみもた、す、雪のふるはと云り

梅かえにきゐる：(5)

春かけてと候へはとしの内に立春の候とき冬よみたる哥にて候哉、はや春にいまかへりたる時をた、かくのことくいへることはにて候哉、如何

春かけてとは春に成ても猶冬のやうに雪はふると也、冬のちかきにむかへて春かけてとはいふ也、春ふかく成てはかけてとは不可詠、催馬楽呂哥也
春たては花とやみらん(6)

僻案抄には見らんはみるらん也と注せられたり、如何

如僻案抄みるらんと心え候、るもし略したるはかり也、みえんと云説不可用とをしへ候き、万葉にもみらんと云「詞多候歟

心さし：(7)

僻案抄には折と注せられ侍り、此儀如何

折也、居といふ儀不可用之由聞侍き

春の日の光に：(8)

春の日のとは春宮を下の心にふくみてよめると申、如何、又かしらの雪はしらかの事にや、わひしきとかなしきとその心いか、ちかひ候哉

春の日は春宮御事也、陽成院東宮の御時御同居ありけれ

は東宮の御休所事也、かしらの雪しらかなるへし、わひしかなし凡同事にて侍へし、物かなし物わひしらなともいへり

花のかを風のたより…(13)

これは花のかをうくひすのなくかたへつかはしたるにて候哉、不審

無殊義、花の匂を便風にしりて鶯も花の所に来へきなれば如此よめり、あなち我つかはずにあらねとやるといふ、

如此詞常事也、やると云事こなたへくるにもいふ詞也、呼鶯春吹裏など、文選にもあるとかや

かすか野はけふは…(17)

此哥伊勢物語にはむさしの、と候、不審、又此哥ことはなくてはこ、ろえかたく候歟、若子細をはかの物かたりにゆつりてこ、には畧してかくさる、事歟、たとひことはなくとも一首のうへにて分明にきこゆへき事歟、かの物語のことはさなから書たる所も此集にあり、しかるにこ、にかきりて畧之、故ある哉、如何

伊勢物語にはむさしの、とありて此集にかすか野と侍る、かすか野にてあるをあつまの物かたりにかき「なすにより

てむさしのとかけり、才学はむやく、た、伊勢物かたりにむさしの、此集にかすかのとありと心えたらんそよく侍らん、こ、にくはしきことはのなき事これ畧たるに不審なし、ある所にはいせ物かたりの詞をさなからも入、又なきも無義、題よみ人しらすとてあまたの哥を入たる所に入り、しさいありぬへきをもあらはさぬ事、又常の事なり、春日野に武蔵と云所あるよし一説ある歟、あなち不沙汰歟

春日野のとふひの…(18)

僻案抄に烽火立られし事と又とふひ野の杜など注分られたり、此外ことなる事あるましく候哉、いか、

和漢烽火事□了、所、に立られしかとも春日野そちかきまての事なるへき、杜事は不用にて侍し、「烽火事国史に大和国春日野に烽をあげて平城に通すと注せる歟、筑前国に被立しは天智天皇のましくける時と云々、其外にはことなる義なし

かすかの、わかなつみにや…(22)

わかなつむに白妙の袖ゆへなどのある事にて候哉、又ふりはへたるとはいかなる躰にて候哉

白妙の袖た、袖までにて候、但此集菊哥の所に白妙の袖か
と、よみ候は別事歟、白妙の衣うつなと云もこれと同事也、
袖ふりはへはうちはへなと、いふ詞にかはる事なし、若菜
つむ人々野遊のすかた袖うちかはし袖うちふりなとみなお
なし躰なるへし、但又無躰の事を袖うちふりしともいふ事
歟

春のきるかすみ…(23)

はるのきるとうちいたしていへるはかりにてその躰も「候は
ては不審も候へき哉、さほひめのなとよみ候はぬも猶子細あ
るへき事候哉らん

春のきるといふ事春になれはかすめる也、霞を衣によせた
り、雲の衣も同躰也、万の織物たけはつよくぬきはよはき
物といへり、ことにぬきをうすみといへは山風にみたれぬ
へきなり、さほひめの沙汰に及へからず、春といへは法界
みなかすみの衣なれは春のきるといへり

あさみとりいと…(27)

柳かのか文字はうたかひたる歟もしにて候哉、又かなと申下
署のことはにて候哉

柳かは柳哉といふ心なるへし、玉にもぬくか春のあをやき

とある本もみえ侍る歟、当流た、柳かを用、あさみとりも
浅也、朝説をは不用」
も、ちとり…(28)

僻案抄に両説あり、此鳥まことはいつれの鳥を申候やらん、
たしかに一説の御口伝をうけたく候

僻案抄に両説候歟、愚本被借失て不及引見候、家説先百千
の諸鳥と心得候、又鶯の説これも一向に不捨候、萬葉に、
我やとの糸のみよりはむも、ちとり千とりはくれと君はき
まさす、とある歟、これもうくひすとはきこえず、此集鶯
の哥をはなれても、ちとりよふことりなど入たる心にて
おほよそをしはかられ侍るにや、後拾遺にも鶯の哥をはな
れて入たる歟

をちこちのたつきも…(29)

たつきもしらぬとはいかなる事にて候哉、よふこ鳥又いかや
うなるを申候哉、不審

たつきはたより也、便也、よふこ鳥春の山などに鳴鳥、其
すかた何鳥ともたしかにはならず候、但三鳥大事など申
て、はと、猿、はこ鳥など申めり、高麗にある女の子をく
して野を行時鶯に子をとられて歎死て彼鳥となれり、はや

こくくと鳴、我子をよふ声也、それをはこ鳥と云ともいへり、よふこ鳥この説を似よりたると申き、鶯と云一説も侍るにや

春くれは鴈かへる也… (30)

僻案抄に道ゆかんついでと注され候、此儀まで」にて候や、

如何

僻案抄説同前、又行ふる、詞、ことやつけまはしはことつけつたへまし也

色よりも香こそ (33)

哥の心、すみし人はむかしと成て今はあるしもなきやとにさける梅に対してよめる事にて候哉、梅そのものしはあまれる字までにて候哉

(凡御了簡のことくにてても侍へし)もの字あまりたる字也、

一首躰に就ては異国の古事も侍る歟、照明大子の女を思けるか彼女我國へ帰ける時宮中の庭の梅花袖に入て帰りて即死云々、大子歎の余に尋行云々、此袖の梅をみて形見とせる事の侍るとかや、此□の子細さしてさたにをよはざる歟、

或説につきて無詮なければとも」凡注也、又もの字あまれる字の説勿論歟

やとちかく梅花… (34)

まつ人の香とは梅につきて人の袖の香、故事ある事にて候哉、其儀如何

まつ人の衣裳のにほひにまかふもあちきなしと也、殊なる

子細なき歟

梅花たちよる… (35)

此哥人のとかむる香これも故事候哉、又た、大かたの香のふかくにほふをよめるはかりの儀にて候哉

これも大かた同前、はやく梅か、のうつりたる心よりほかにさしたる儀も候はず、かうはしきうつり香を人やとかめんとなり、又とかむるは人の問来也と云説も候□らん

春の夜のやみは… (41)

僻…にはかひなき事をあちきなくなといふやうなる詞也と侍り、しからは此やみ花の色をはかくせとも香はかくれねはかくすかひなしといへるにや、あちきなしにてはふと心えかたき歟、如何、無益をあやなしと申よしも侍るにや、彼是不決候

如僻案抄已なし、あちきなし、などの事いひもてゆけは同事に侍へし、尤可随其説也、無益と心うへき歟、又あやな

と云も、しの字略たる心也、あやにと云詞はあやにくにと云也、後撰に、くれはとりあやに恋しくありしかは二むら山もこえずなりにき、とあり

人はいさ心も…(42)

此哥の詞に云、かの家のあるしかくさたかになんやとりはあるといひいたして侍ければ、此さたかになんやとりはあると申ことはさと心えにく、候

此哥のことは、はつせにまうつることとあるは、貫之か父文袴(ハカマ)か子をもち侍らて長谷観音にいのり申て貫之を生せり、しかれば貫之つねに長谷にまいりけるに宿せるやと也、人の家とあるは淨尊法橋の家也、古郷といふは貫之つねに參所なれば長谷を古郷と云り、かくさたかになんやとりはあるといふ心、人こそとひたゆれとも、やとはかはらすある物をと恨たる心なり、しかれば又人はいさ心もしらすとあるしをそくう(マウ)たかひて花こそむかしにかはらねとよめり、あるしは客人をうらみ、客人はかへりて人はいさとうたかひたる問答おもしろくみえ侍り

春(ハル)とになかる、川を…(43)

これは花の水にうつれるかけの事にて候哉」

しかなり

くるとあくど…(45)

暮と明との事か、人まとは人のみぬまの事歎

同前、目かれもせぬに也、目別とも書歎

梅か、を袖にうつして…(46)

此二のて文字はた、そへたる字までにて候哉

て文字はもし、すむへし、賀部にと、めをさては思いてにせんとあり、てはと云事これおなし

ちるとみてあるへき…(47)

此うたては花に対してのあやにくまでにて候哉

うたては転(ウツ)と云字也、一切の物のあまりたるやうの心、いやましなどやうの義也、花に對て恨たる詞にもなるへし也、ちらはちるよとみて無心にて思われすはしのひもせしなどの心なるへし」

ことしより春しり…(49)

なんとは下知したる心候歎、よもならばしといへる心にて候哉

さらなんは下知したる詞也、春下に、ちらはちらなんとあるも、ちらはた、ちれにて候

山たかみ人もすさめぬ：(50)

すさめぬとはあひせぬ事を申候哉

しかなり、興せぬ也、みはやさんはもてなさん也、はやさ

んは栄の字をは書歟

世中にたえてさくら：(53)

此哥の心なにとよめる哉、又ことにはなきさの院にてとあり、
いづくにある所にて候哉

花時皆こゝる散乱として花に迷なれは一向に花なくは禪心
なるへきといふ心なるへし、なきさの院撰津国片野ちかき

所河のほとりのみち」とかや、惟喬親王の御所云々、業平
彼宮につかへたてまつりてつねに参かよひけり

石はしる：(54)

これは花を滝にへたてられたるよしにて候哉

さにて侍、無儀とぞ申されし、又水になかるれば里の人も
みる也、さなくはおりてみせまし物をとよめるといふ義も

あり、大やうなるそよかるへき

みてのみや人にかたらん：(55)

見てのみやかたらましと思ひて又おもひかへしてた、折て家
つとにせんとやめる心歟、又いつれも思ひさためぬあらまし

事までの儀にて候歟、如何

一首の心ことなる儀なし、みてかたるはかりは不足なれば

折て人にみすへき也

色もおなしむかし：(57)

さくらをかくしてよみ入たる事歟、物の名などの哥の「類に
存なされ候、こゝに入たるはやうある事などにや候らん、如
何

さくらをかくしたるとはきかす、色香とてさくと侍る花の
事にて侍へし、花はさくもちるも年々／＼にたちかへれば常

住なれと老年は若年にかへらざる心老いかはりゆくなれば
あらたまるとなり

たれしかもとめて：(58)

僻案抄には誰しかももしはやすめたるものやうに注せ

られたり、此儀をまもるへきにや

家説も同前なり

桜花さきにけらしも：(59)

山のかひいつくのほとりをさして申候哉

山あひなとの事歟、峽のあひの字をかひと訓したり、又人の名に
谷をかひとよひたる事のあるを思へは「谷も大略同事かな

と推量し侍る、これは聞し事のほかよはき才学にて候也

みよしの、山へにさける…(60)

あやまたれ、はうたかふ事にて候哉

あやしく不審なる心にて候也

さくら花春くは、れる…(61)

此哥僻案抄にも注せられ侍れとその注猶分明に存知せられす候、あかれやはせぬ、いか、心得へく候哉

此哥先達種々申ける歟、僻案抄義大概当家も同心にて候、

其儀そしかるへく候はんすらん、但上に如申候、依無本不

及引見、此終句あかれやはするとこそあるへけれと古人に

申ける人も侍り、不可然、この哥の前に、さくら花さきに

けらしな侍る哥の五字にはかはりて、さくら花よとよひ

いたして汝は春のくは、る年たにも人々なとあかれぬぞ、

あかれよかしと云ことはにて侍り、御不審尤の事也

あたなりと名に…(62)

此哥又いか、心得へく候哉、伊勢物かたりのうへをもこ、の

御高判にて乍次可決也

此哥更儀あるへからず候、き、しはかりにて候也、あたま

りと名にこそたてれ、万花皆あたにちる物にて候へは名に

たつ花なれと花あれは人のとひくる事もありけり、としに

まれなる月□みれともこぬ人を花のまちつけたる」といふ

心歟

ちりぬれはこふれと…(64)

けふこそあたりてよめるこ、ろ不審

これも無義、けふこそともこよひこそとも時にしたかひて
よまむ事うたかひなし、けふこそはあすは雪とそといへ、
けにもおなし躰なる歟

さくら色に衣はふかく…(66)

さくら色にそむるいかやうなる事候哉

さくらの直衣さくらの狩衣うすやうにいたるまで名ある事

は候へともこれはた、さくらを賞する余にかの花の色にそ

めてきんとのあらましにて候也、紅のすゑつむ花の色にも

そめむらさきにもそむることくた、桜の色をうつくしみ

ていふなるへし

わかやとの花みかてら…(67)

かてらとはついでといふ事にて候歟

しかなり

みる人もなき山さと…(68)

後にさきてこそ若とひくる人も侍らんかしとひとりごとにおもひたるこゝろにて候哉、又後にさけと花にいひかけたる心にて候哉

(二)なから御了簡のくへからす(69) ほかのちりてのちにさけとよめる也」

春下 卷第一

春かすみたなひく山の：(69)

うつろはんとやとはちらんとやの事歟、又乍次不審申入候、たゝ色のかはるはかりをもうつろふと申候哉

うつろはんとやは色につきたる詞にて候、又うつろひ行てはかならずちれはちるをもうつろふといは、いはれぬへし、貫之集に、うつろへはちりとちりぬる山桜とも侍る歟、下の哥にも、心つからやうつろふとみんとあれはちるかたともみゆれとも春風に花もさきそひとおとろへも行へき事なれば此哥しかと」ちる事とも申かたし、菊のうつろふも白き色の紫になれはうつろふといへり、万花みなおとろふる色あるへし、又映事を申は別の事なり

までといふにちらて：(70)

僻柔抄にしはしまて也と注せられ候、此外ことなる義などは

候ましき歟、猶如何、又下句の心はきこえ候ふんまでの事候歟

しはしまて、愚存おなし、下句きこゆるほかに義なし

此里に旅ねしぬへし：(72)

ちりまかふにといへる事にて候哉

ちりのまかひまされ同事也、花のちり乱にみちもみえず家ちをも忘るゝとなり、よしの山に旅ねしてよめる哥とかや

〔頭注〕此義は不注遣、大伴家盛か哥也、家持子、吉野

山に旅ねしてよめり

うつせみの世にも：(73)

似たるかのかもしは哉候やらん、花さくらさくら花、此句のをきかへやうなにと候につきて上へつけ下へつけ候哉、其趣無才学候、不審

花のあたる事うつせみのはかなき世にもにたる哉となり、花さくらさくら花、たゝ同事と申候し、花桜は菅家万葉并拾遺にも入歟、又古哥合の「題に花桜とあり、やかて花さくら花と哥によめる歟、上に花をつけてよむの心はかりかたし、又花さくらといひつけたる花の侍りともおほゆ、おほつかなし

〔頭注〕源氏可引見

さくら花ちらはちらなん…(74)

僧正遍昭よみてをくりけるとことには侍り、しからは遍昭はこれたかのみこの故郷おなし所にすみし人歟、た、故郷人までの義にかくよみ給ひし事歟、如何

ふる里人とあるは京なる人の事也、惟喬親王清和に位を、しとられて貞観十四年」秋出家し給て小野の山里にこもり給ける時よみて京なりける遍昭につかはしける也

いさ、くら我も…(77)

僻：に一盛の事と見えたり、猶此外口伝も候哉、又上句にていひはて、かくて世に久しくありなはと下句にて又いひはしむるやうに心得へく候哉、兩段如何候へき哉

我も一盛ありなは人におもはれてうきめをみらんとなり、我もちりなはといひきりて一さかりありなは人にとつ、けたる心なり、ことなる義なし、いとさかりといへる本あるよし古人申侍れとも」当家不及沙汰、定家不用也、古本にひとさかりとある本をかたはらにひもしをいとなをしたるもあり、うつしもて行本ともさやうのも侍へし、返、用へからす

たれこめて春の…(80)

たれこめてとは戸はりなどをたてこめたるにて候哉、又此哥のことはに、おれるさくらのちりかたになれりけるをとあり、哥にはまちしさくらとよめり、首尾如何

たれこめてはかうしすたれ床の帳トナリなにともあるへし、風にあたらしと侍るにて心得へし、「おれる桜をみていつくの花をもみんなと思ひて侍し花の盛をは風にあたらしとてみす、おり枝の花のちりかたになれるにて大かたの世の花のうつろふをしりてよめるなれば、首尾あひかなひてきこえ侍り

ことならはさかすやはあらぬ…(82)

僻：にかくのことくならはと注せられ侍り、かくのことくならはといひてはみる我さへのさへはいか、心得候へきやらん、此儀にてはしつ心なしもいか、こ、ろへのゆくへく候哉、又かくちる期となるへきならは也と申説の候哉、彼是不審、さかすやは」あらぬと候句の心なと委あそはし付らるへく候如僻案抄かくのことくならはなり、さかすやはあらぬとはさかすともあれかしといひたる詞なるへし、かやうにさきてほとなくいそかはしくちれば、みる我心も花とつれて散

乱をいそかはしきにといひたる義也、上にも世中にたえて
さくらのとある哥のことし

久かたの光のとけき… (84)

此らのはねやうは何としたる事に候、かくは侍るとおもふ
心をすゑにのこしてみるへく候哉」

此らん教訓をきかす、大よそ御覚悟の外にても侍へき歟、
但た、花のちると□□にてとも侍へし、(下の哥に春の色
のいたりいたらぬの哥も同)又我やとにさける藤浪立か
へりすきかてにのみ人のみるらんは、なにとてかと云へき
にあらず、又た、すきかてにみるとはかりなる詞也、あは
れてふことをあまたにやらしとや春にをくれてひとりさく
らん、これは世俗に何するらうなと云ことくのらんにて候
歟

雪とのみふるたに… (86)

此哥の心花をおしみたる心にて候歟、興添て愛したる心にて
候歟

雪のことくふるをたにおしとおもふに風の」よそまで吹ち
らすといへる心によ

山たかみみつ、わかこし… (87)

心にまかするへら也とはちらすらんとにて候哉、既ちるを見
てかくいへるにて候哉

へらなりはへしなり、おく山に我みつる花をおしむ人もな
し、さこそ心のまゝに風の吹ちらすらめと云也

花の色は霞にこめて… (91)

かをたにのたにはた、あまり字にて香をぬすめまてにて候哉、
又香をなりともせめてぬすめにて候哉」

かをなりともせめての心たかふへからす

寛平の御時きさいの宮のうた合のうた (92)

きさいのさもしはにこるへく候哉、すみてよむへく候哉、い
かなる宮の御事にて候哉

きさいのさもしすみて候、寛平の后は照宣公娘陰子と申候
也、七条中宮也

花の木も今は… (92)

春たてとは春の日かすのたちすきぬれはといふ心にて候哉、
此哥の下句恋の哥のやうにきこえ候、此心又如何」

春に成ぬれはとも心うへし、又春すくれはともいふ歟、下
句事、古哥はみな恋の心も季哥にましれり、又凡人の心う
つりやすき事不可好はとも心うへし、但是花はうつるふ物

そと人のいひならはせはうへても無益のよしといへる義も
侍り、これをも用侍る事なり

みわ山をしかも：(94)

僻：には然也、さもかくすかといふ事なりと注せられたり、
此儀を実とすへく哉、此さもといふことはのうへにて猶分明
に存知わけす候」

然もかくすか也、さもかくすかも心えられたる詞にて候、
しかりとてといふ詞も「さ」とてといふ也、さもともた、
さともいふおなし事なるへし、さそかしとも、愚意にかは
らす

いさけふは春の山：(95)

僻：にくれなはなけのとはくれぬともよかるへきといふ也と
注せられたり、此儀如何、又すゑのかはも心えにく、候、な
けとは文字は何と書へく候哉

僻案抄善説なるへし、くれぬともなかるへき花のかけかと
いへるなり、又なけは無といふなり、文字に別の書様ある
やらん、未勘之」

いつまてか野へに：(96)

千世もへぬへし、いか、心得候へき哉、哥の心不審

無義ときくはかり也、かりそめに花みにいて、も野に日
を、くる也、花のちらすは久しく野へにもあるへきといへ
る歟

吹風にあつらへつくる：(99)

あつらへつくるいか、心得へく候やらん
風の心ありて花をちらさぬ事あらは」此一木をは除ヨキとつた
へてもいふへき物をと也、あつらへは我すへき事を人にさ
するをいふなるへし、風によくいふ物あらはあつらへまし
也

さく花は千くさ：(101)

千くさなから不審、春花千種事など故事候哉、如何
さく花はとあれは千くさ無不審、さくら花とある本こそ千
種は猶もいか、とおほゆれ、万花ともいへり、無義とそ
花みれは心さへにぞ：(104)

恋のこ、ろに相似候歟、此こ、ろ如何
色にいてしと躬恒かよみ侍る、恋にはあらず、「花にあく
かれて心をうつさはあたるさまに人もこそみれとよめる
なるへし

吹風をなきて：(106)

花のちるこゝろにて候やらん、手たにふれたるとかこちたる
心ふと心得にく、候

我は手もふれず、しかれば花のちるはた、風のつらき也と
て別の事きかす

ちる花のなくにし…(107)

此やとはいふは文字はあまりたる字にて候哉、如何

しかなり、下の巻々に此とまり多候」

木つたへはをのか…(109)

こゝらの事多ことをつねには申候哉、此哥のこゝら、如何

こゝら多也、そくはくなど云心もおなし

駒なめていさ…(111)

僻案抄には駒なめておなし事也、あまたの人とうちつれて行
事のやうに注せられて候、此義如何、又た、一人行をもちや
うにてもよむへく候哉

なめてならへて也、なへても同事なるへし、一人行をはい

ひかたし、此哥いさといふより」うちつれて行心なり、

花の色はうつりに…(113)

此哥の心ふかく存知したく候

此哥心とて〔委〕しき事きかす、我世の事にとかくしてう

ちまきる、まに花もうつろひぬるといふ心歎、小町宮つか
へしけるひまもなきにわか御世にふるとつかふまつる心な

と申説も待るか、不用

仁和中将のみやすん所の家に哥合せんとてしける時によめる

〔114〕

たれ人の事候哉、又せんとてしけることは重説のやうに候
歎、今も如此も書へく候哉

仁和中将のみやすん所は光孝天皇女御、中将とは是貞親

王也、もとは右中将母同寛平、御同居によりて中将のみや

す所と申、又哥合せんとてしけるといふ事、如此詞ふるく

は書候、今もしせんかきて無子細事も候へき歎、仮令よし

の、花いまたのこりたれは人いさ、らはみんとてみける

時など、かきても無子細候哉とおほえ候」

おしと思ふ心はいとに…(114)

此哥こゝろはいとによられなんといへることは此集のうたく

つと申つたふる事なと候哉、此説如何

此哥集のうたのくつにて候と申説不知候、さる事にて候

は、素性は古今の作者中にも随分光にて候をかし、貫之も

などやこの一首をのそき候はて入候けるそ、此哥義何とも

きかぬ事に候

春の、にわかなつまんと…(116)

若菜は其品おほく候哉、いつれの草くを申候哉、花のちる時節のわかめつらしきやうに候、又まとはぬとは「まよひぬにて候哉、まどふと申ことは当時もよむへく候哉

若菜事年始に雪まなともとめて七種若菜をつむ事也、七種

あり、有説に只今不違注記、此花のちる比あなち七種中とも何とも不沙汰、只何となき若菜などは野遊につむ事あれはよめる歟、ちりかふはちりまかふ也、まどふまよふた、同事なるへし、まどふと云詞当時も一首の躰により様によりて何の子細か候へき、無義とてとかくの事きかす

吹風と谷の水…(118)

風のうへにてはにほひを送る事もみ□見ましやと候へは落花を送りもてくる心に執へく候哉、又水は「花ちりてなかれれるに見なすへく候哉、嶺の梢の花などの影のうつれる事候歟、風□□のたくみ不審

此哥又無義とて委旨もきかす、た、風にちりたるおく山の花も水のさそひ出すはみましやとはかり心え侍りし也

我やとにさける藤…(120)

過かては過かたるにて候哉、人のみるらんとはねとこととはには不審

過かては同心、らんとはてたる事古はかやうによみ候哥多候歟、みるまてにても候へき歟

いまもかも(121)

此五字今もやといふ心にて候哉」

いまもか□といふ詞にて候

春雨に、ほへる…(122)

春雨ににほへる色不審

雨に色まさる心ぬれ色とてよろつ又うつくしき事いふ事多し、このにほへるは香にあらす、色のにほひ也、このほ

かさしたる義あるへからす

山吹はあやな、さきぞ…(123)

あやななは無益候哉、此うたの下句もふとこ、ろへにくきやうに候」

あやな愚意同、又あへなういへる同事歟、うへつる人もこ

よひこぬにといへる也、但橘諸兄大臣山城国井出の寺に山吹をうへたりけるに仍井出大臣ともいふといへり、又迦留

大臣同国光明山の寺を造てかの井出の寺の款冬をうつして

うへて後諸兄大臣のもとへ見におはせよ、といひつかはし
たりければ、ゆかんといひてやくそくたかひければ、迦留
大臣のよみて諸兄のもとへつかはしける哥といへり
おもふとち春の山へに：(126)

(以下欠)

〔翻刻注〕

(1) 1 番歌の答が実際は問より一字上げて書かれていること
への訂正注記。2 番歌以後は答は問より一字下げで書かれ
る。

(2) 括弧内は問の末尾に小字書入(括弧はない)。

(3) 括弧内は答の冒頭に小字書入(括弧はない)。

(4) このあたりの本行に「谷をもを年」の文字残るが、推敲
後の訂正文につづかず。

(5) 以下の答すべて抹消されている。判読可能ゆえ翻字する
が、自信なし。

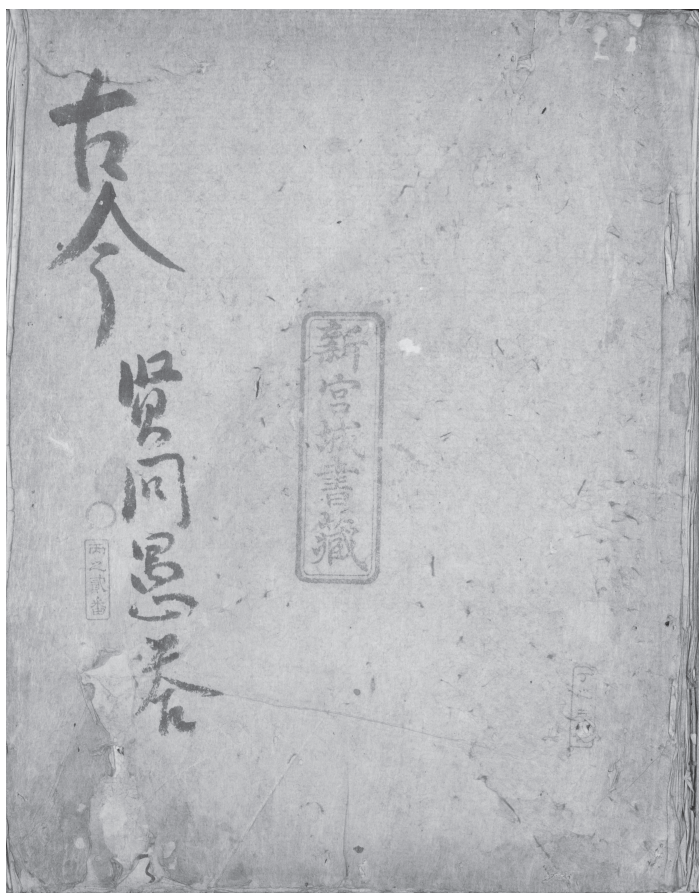
(6) 括弧内は答の冒頭に小字書入(括弧はない)。

(7) 括弧内は小字書入(括弧はない)。

(8) 以下すべて抹消。判読可能なかぎり翻字する。

(9) この答大幅な改訂を施し、短くなっている。抹消部分読
みえず。

(10) 「七種」が重複するのは推敲不十分なため。



古今賢問愚答 表紙

古今集平は所書はついでとて、
 の愚問の巨細代問答を作き、
 小児のつらねをいひ、
 訓大書く、
 赤く、
 春平上
 古今集平は所書はついでとて、
 の愚問の巨細代問答を作き、
 小児のつらねをいひ、
 訓大書く、
 赤く、
 春平上

古今賢問愚答 卷頭

